

# 古ジャワ語シヴァ教文献 「原理の知識」和訳（3）<sup>1</sup>

安 藤 充

## 34.

アートマンには次のような区別がある。すなわち下等、中等、上等。（まず、アートマンとは）記憶と知識をもつ人に宿る。それで我々は真理を味わう。それは花卉のアートマンと呼ばれ、善悪（の行為）を打ち砕く。（このように）聖典は記す。（一方、他の人々が言うには）アートマンが覚醒の境地にあるとき、及び、アートマンが第四の境地にあるとき、善悪の退治には関与しない。これは真理の始まりについての説明である。それから、下等、中等、上等に相応してアートマンが生じる。それによって記憶と知性を獲得する。さらに無知と記憶喪失も。最初からすべて一貫した営みであり、最上のものから（生じるのが）記憶と知識である。まさにこのようにして主は具現すること確実である。そして、アートマンが覚醒の境地にあるとき、及び、アートマンが第四の境地にあるときも、姿を現すことになる。その具現している間に、善悪の打破に関わることになる。おそらく他の人々がこう言うかもしれない。それはあり得ないと。次のような例が示される。たとえば水晶玉があって、その水晶玉が飛び抜けて白く透き通っていて濁りもないと確かめられると、その玉の色と言えば、透明で濁りなしということになる。しかしながら、そうであっても、赤とか黄色とかの色に染められれば、その玉は色が変わったということになる。色を帯びた状態になれば、結局のところ（玉とその色）は不可分である。それは染め付けとか装飾とかと呼ばれる。あたかも玉自体の色が消し去られたかのように思われる。（しかし）玉の深奥部は汚れなきままである。したがって、玉と色とは別個に（認識）しなければならない。結果として透明だとか白いとか濁りがないとか見える玉は、さらに言えば、もともとのその性質に戻ったのであって、かつては色が付けられていたということもあろう。つまりところは、（着色のないかたちでアートマンは）具現するということである。

## 35.

耳と聴覚は区別しなければならない。そうであるから、アートマンが覚醒の境地にあるとき、そして、アートマンが第四の境地にあるとき、全世界の個我となっているのだが、極小で、見て捉えることはできず、微細であり、穢れなく、透き通り、純白である。無傷で汚点がない。水晶玉の（ごとき）形をとっているのである。したがって善悪（の行為）に影響されることはない。火がつけられても焼き尽くされることはない。水に浸されても濡れることがない。なぜなら、微細、極小であるから。感覚器官で把捉されず、認識を超えておりながら、確固として存在し、人知に依拠するものではない。見るものであって見られるものではない。支配するものであって支配されるものではない。風や声や思考に形を与えるものであって<sup>2</sup>、形づくられるものではない。それはその場所を占めるものを飾ることになる。その場所を占めるものがどのような様相であれ、それと同じ様相をする。それ故、それが善悪（の行為）を打ち消すのに関わるかのように思われる。しかしながらそれは否である。アートマンが熟睡の境地にあるとき、そしてアートマンが夢の境地にあるとき<sup>3</sup>、輪廻転生を経験する。善悪（の判定）と闘いながら、天界、人間界、畜生界を巡る。熟睡の境地とは、（その意識の）喪失（の状態）である。それはアートマンが眠っているからである。夢の境地とは、その人のアートマンが夢を見ている（状態である。）アートマンが熟睡の境地にあったり、夢の境地にあたりするとき、それはアートマンの流転<sup>4</sup>と呼ばれる。一方で、アートマンは唯一なる存在である。それは粗大なるものとは異なる。アートマンはすべての原理とは別個の<sup>5</sup>存在である。アートマンは層をなしている<sup>6</sup>。あたかも蜂の巣のように。これがアートマンの様相である。均一な状態にある。それでアートマンは蜂の子と呼ばれることもある。居場所がそこにあるからとして。

さて、アートマンの様相について（さらに）考察しなければならない。それは夢の境地にあっては、心神喪失、ものごとの識別ができないという状態である。記憶が半分しかなければ、見たところオランウータン<sup>7</sup>である。水中で自分の姿を鏡に映して見るように、存在するものも存在しないものも（混然として）知覚するのである。（アートマンが）熟睡の境地にあるときは、記憶は喪失、混濁、ないしはまったくない。あたかもアートマン（じたい）が生を失い消え去ったかのように。なぜなら、末期の睡眠で眼が覆われているから。覚醒の境地にあるときは、アートマンは明察の眼をもち、存在するものと存在しないものを直接に見極めることができる。なぜならその境地は明るく輝き、曇るところがないから。その光輝は天界のそれに等しく、透き通っていてサファイアの光を放つ<sup>8</sup>。アートマンが覚醒の境地にあるときはこのようである。熟睡の境地、夢の境地では、根本原質の原理によって覆われ隠される<sup>9</sup>。根本原質が抱え込める限りにおいて<sup>10</sup>。心(manas)が想像力を働かせながら四方八方へと動き回る<sup>11</sup>。日夜の経過について、

違いはどうかというと、人間にとっての1年は、覚醒の境地における一晚である。人間にとっての12年は、覚醒の境地における1月である。人間にとっての1ユガは、覚醒の境地における1年である。人間にとっての4ユガは、覚醒の境地における1タパ<sup>12</sup>である。以上がアートマンが覚醒の境地にあるときの様相である。

第四の境地にあるとき、アートマンは何の障碍もなく如実に明晰にすべての事象を識別する。存在するものと存在しないものとを。アートマンはやすやすと過去現在未来を弁別する。なぜならば彼は智慧を有し、明晰な記憶を自らのものとしているからである。その光輝は白く清らかで、水晶玉の色のごとくである。透明で汚れない。常に真実を映し出す。日中でもいつでも。昼夜を問わず（その輝きが）遮られることはない。さらに言えば、それは、想像力を働かせる意識がとどかないところにある。他方、覚醒の境地であれば、意識が想像力でもって四方から近づき取り巻く。したがって覚醒の境地は第四の境地より下位にある。なぜならば第四の境地は微細であり、孤高であり、意識によってはたどりつけないからである。第四の境地をさらに上回るものがある。なぜなら、主たる神<sup>13</sup>がおられるのは、第四の終極の境地<sup>14</sup>であるから。その威力は燃えさかる光であり、千の太陽の炎熱に等しい。他方、（第四の境地では）それと異なって熱はない。孤高にして透徹、日中でもいつでも、昼夜を問わず（その光が）遮られることはない（というのが特徴である。）（しかしながら第四の終極の境地では）すべてを知りすべての行為をなし得る力を具える<sup>15</sup>。（すなわち）遍満する力、支配する力、知る力、行動する力を有する<sup>16</sup>。したがって、第四の終極の境地は第四の境地に勝る。微細や極小（も勝ること）についても勿論である。孤高にして意識によっては到達されない。極まるどころ、（第四の境地においてアートマンは）最高のヨーガを獲得するのである。

### 36.

第四の境地と第四の終極の境地の存在についてどうして語るができないのか。それは意識によっては到達されないからである。意識というのは、存在するものと存在しないものとを識別する手だてである。他の論者はきっこう言うだろう。

三つの認識根拠こそが理由である。正しい知識がそなたの眼にとっての灯明となる。三つの認識根拠とは、直接知覚という認識根拠、推理という認識根拠、聖典という認識根拠である<sup>17</sup>。粗大なもので、眼で見えるものすべて、耳で聞かれるものすべて、手で触れるものすべて、これらは直接知覚という認識根拠によって認識され得る。第四の境地のごとき微細なものは、推理という認識根拠によって認識され得る。第四の終極の境地のごとき極めて微細なものは、聖典という認識根拠によって認識され得る。以上が粗大あるいは微細である境地の様相であり、アートマンはそれに適応する。粗大であったり微細であったりするのはいアートマン自身の特性である。覚醒の境地にあるアートマンは周到に熟睡の境地のアートマンと合流する。また夢の境地にあるアートマンは、やす

やすと一気に覚醒の境地へと至る。さらに第四の境地に到達し、揚々として第四の境地における確固たる地位を占める。そしてついには第四の終極の境地に至るのである。以上が、微細なるアートマンの様相のすべてである。

### 37.

(アートマンは) 次のように転生する<sup>18</sup>ものである。すなわち、アートマンは大地に生まれる。大地を体として<sup>19</sup>確立する。それは六味に遍満する。五大元素を構成する核は、地、水、火、風、空である。これらが六味を発生させる。(六味を)列挙すれば、酸味(amla)、渋味(kaṣāya)、苦味(tikta)、辛味(kaṭuka)、塩味(laṇa)、甘味(madhura)。酸味は酸っぱい、渋味は渋い、苦味は苦い、辛味は辛い、塩味は塩辛い、甘味は甘いという意味である<sup>20</sup>。これらが六味と言われる。

それらは体を成長させる源と言われる。体を成長させる第二のものは、六味が食べ飲み物として男子や女子に摂取される、その食べ物飲み物の栄養分である。それらが血や肉や脂肪分となる。体を成長させる第三のものは、血や肉や脂肪分の重要成分であり、それらが精液(kāma)と血液(ratih)となる。それらはひとつの肉体(こども)として新たな生を受けることになる。血液よりも精液が多ければ男の子になる。精液よりも血液が強ければ女の子になる。精液と血液が同程度であれば睾丸なし男、女のように女でない人になる<sup>21</sup>。一方、精液は骨、筋肉、体毛になる。血液は血、肉、脂肪になる。

五大元素の説明は次の通りである。次のように(五大元素はそれぞれ)身体の根本となっている。すなわち、地は皮膚、水は血液、火は肉、風は脂肪、空は骨髄になる。

五つの微細の変化について言えば、声の微細は耳に、触の微細は皮膚に、色の微細は眼に、味の微細は舌に、香の微細は鼻になる。これらは五つの感覚器官と呼ばれる<sup>22</sup>。さらに、世界卵<sup>23</sup>、七つの冥界<sup>24</sup>、七つの世界<sup>25</sup>がある。七つの世界と言うのは、ブル界は腹、プワル界は心臓、スワル界は胸、熱界は首、人間界は舌、大世界は鼻、真実界は眼となる。七つの世界とはこうであると言われる。七つの冥界はと言うと、パーターラが肛門、ワイタラが腿、ニタラが膝、マハータラが脛、スタラが足首、タラータラが踵<sup>26</sup>、ラサータラが足の裏になる。以上が七つの冥界の説明である。

### 38.

世界卵と言われるものが身体に生起するのは次の通りである。七つの山は不動である。七つの海はうねり波立つ。七つの島は輝ききらめく<sup>27</sup>。十の風が脈管に流れ込む。

七つの山とは、マールヤワーン山が陰囊、ニシェーダ山が陰茎、ガンダマーダナ山が脾臓、マラヤマヒーダラ山が肺、トリシュリンガ山が胆汁、ウィンディヤ山が心臓、マハーメール山が肝臓となる<sup>28</sup>。以上が七つの山と呼ばれるもの(の身体への生起)である。

七つの海とは、トーク海は尿、キラン海は血、アシン海は汗<sup>29</sup>、ミニヤック海は脂、

マドゥ海は唾、スス海は骨髄、ペハン<sup>30</sup>海は脳となる。以上が七つの海と呼ばれるもの(の身体への生起)である。

七つの島とは、ジャンプ洲は骨、クシャ洲は筋肉、シャンカ洲は肉、シャルマリ洲は皮膚、ゴーマダ洲は体毛<sup>31</sup>、プシュカラ洲は爪<sup>32</sup>、クラウンチャ洲は歯となる。

脈管というのは、筋肉の中の空洞である。体の下部、臍の下にあって、臍の方へ上昇する<sup>33</sup>。...があり<sup>34</sup>、数は7020。特別な脈管は十を数える。具体的には、イダー、ピンガラー、スシュムナー、ガーンダーリー、ハスティ、ジフバー、プーシャー、アラムブシャー、クフー、シャンキニー<sup>35</sup>。イダーとは右の脈管で、食物<sup>36</sup>の経路で、...<sup>37</sup>、肛門に抜ける。ピンガラーとは左の脈管で、水分の経路で、...<sup>38</sup>、膀胱に下る。スシュムナーとは、(左右の)中間の脈管で、空気の経路で、三つに分かれている。ガーンダーリーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、口、眼、鼻、舌、頭頂に通じる。ハスティとは、脈管が交差する所で、風の経路として、全関節に通じ、皮膚や体毛に到る。ジフバーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、肝臓に到る。プーシャーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、肺に到る。アラムブシャーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、心臓と胆嚢に到る。クフーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、脾臓に到る。シャンキニーとは、脈管が交差する所で、風の経路として、陰嚢と陰茎に到る。以上が十の脈管と呼ばれるものである。

### 39.

さて、風と呼ばれるものについて説明しよう。分類すれば、プラーナ、アパーナ、サマーナ、ウダーナ、ウィヤーナである。プラーナ風は肝臓にあって、胸まで至り、最高の<sup>39</sup>風であり、すべての風の道に行き渡る。機能としては、命となり、呼気となる。アパーナとは、膀胱にある風で、食べ物飲み物を消化する。(食べ物飲み物は)精液と血液<sup>40</sup>になり、そのかすが糞尿となる。香りを嗅がれたものの精髓は粘液、鼻汁となる<sup>41</sup>。ウダーナとは、頭頂にある風で、機能として、眼と口とを作用させる<sup>42</sup>。ウィヤーナとは、全関節にある風で、機能として身体に作用し、老いと死に関わる<sup>43</sup>。サマーナとは、心臓にある風で、食べ物飲み物を消化し、血と肉と胆汁になる。以上が五つの風と呼ばれる。十の風(となると)次のとおり(追加される)。すなわち、ナーガ、クールマ、クリカラ、デーワダッタ、ダナンジャヤ。ナーガ風は嘔吐を起こす<sup>44</sup>。クールマ風は体を震わせ老いをもたらす<sup>45</sup>。デーワダッタ風の機能は欠伸である<sup>46</sup>。クリカラ風はくしゃみを起こす機能がある<sup>47</sup>。ダナンジャヤ風は音声となる。これらが十の風と言われる。風は数としては11あるのだが、その作用は十種である。それゆえ、十の風と呼ぶ<sup>48</sup>。

### 40.

このような背景で、花卉のアートマンは確立している。(アートマンを)分類すれば、

アートマン、パラートマン、アンタラートマン、スークシュマートマン、ニラートマン。

アートマンは感覚器として心臓に位置し、思考をその機能とする。パラートマンは感覚器として眼に位置し、見ることをその機能とする。アンタラートマンは感覚器として頭頂に位置し、覚醒と睡眠の中継をその機能とする。スークシュマートマンは感覚器として耳に位置し、聞くことをその機能とする。ニラートマンは感覚器として皮膚に位置し、暑さ寒さを識別することをその機能とする。以上が五つのアートマンと呼ばれる<sup>49</sup>。

心というのは一つだけであるが、加えて十の感覚器官がある。具体的には、聴覚は耳にあり、それゆえアートマンは声の善し悪しを聞く。触覚は皮膚にあり、それゆえアートマンは暑さ寒さを識別し、身につけているものの柔らかさを体感する<sup>50</sup>。視覚は眼にあり、それゆえアートマンは色や形を見る。味覚は舌にあり、それゆえアートマンは六味を味わう。嗅覚は鼻にあり、それゆえアートマンは香りを嗅ぐ。悪臭と芳香とを<sup>51</sup>。発話機能は口にあり、それゆえアートマンは声を出し、存在するものと存在しないものを具体的に定義づける。把捉機能は手にあり、それゆえアートマンが捉える。歩行機能は足にあり、それゆえアートマンが歩む。排泄機能は肛門にあり、それゆえアートマンは放屁<sup>52</sup>、脱糞する。生殖機能は女陰<sup>53</sup>と陰茎にあり、それゆえアートマンは血液と精液を出す<sup>54</sup>。このように、十の器官が世界という身体に取り付く。

さらに加えて、統覚、意、自我意識がある。統覚はアートマンが思惟するためのものである。意はアートマンが構想するためのものである。自我意識はアートマンが事物を支配するためのものであり、また、アートマンが善悪の行為を行なうためのものである。

これら統覚、意、自我意識、及び十の器官は、十三の原因<sup>55</sup>と呼ばれる。加えて、三つの特質がある。サットワ、ラジャ、タマである。

#### 41.

三特質は太初から確立している。ブラフマーは心臓に、ウイシュヌは胆嚢に、イースワラは肝臓に確立する。五仙の住処は次の通り。クシカは皮膚と体毛に、ガルガは血と肉に、マイトリーは脂肪と筋肉に、クルシュヤは骨と骨髄に、ウリッタンジャヤは胴体に住まう<sup>56</sup>。

神仙の住処は次の通り。マヘーシュワラは陰嚢に、ルドラは腸に、シャンカラは脾臓に、シャーンブは肝臓<sup>57</sup>に、サダーシワは膀胱<sup>58</sup>に、パラマシワは胸に住まう。

七仙の住処は次の通り。アーディティヤは右眼に、ソーマは左眼に、アンガーラは右耳に、ブダは左耳に、プリハスパティは右鼻（腔）に、シュクラは左鼻（腔）に、シャニシュチャラは口に住まう。

神々の住処は次の通り。インドラは胸に、ヤマは右手に、ワルナは背に、クペーラは左手に、ワイシュラワナは腰に住まう。

ウィディヤーダラやガンダルワの住処は次の通り。チトラセーナは剛毅となり、チトランガダは勇気になり、チトラスタは盤石さになる。ガンダルワは、自制、満足、高揚、歓喜、興奮、耽美と一つになる。以上がサットワの住処である。

ラジャの住処は次の通り。ダーナワは、残忍、猛烈、短気となる。ダイティヤは、怒り、憤り、立腹となる。ラークシャサは、迷妄、貪欲、嫉妬、軽卒、無謀となる。以上がラジャの住処である。

タマの住処は次の通り。悪鬼ヤクシャは飢え、ひ弱さ、渴きとなる。悪鬼デンゲン<sup>59</sup>は、疲れ、脱力、痛みとなる。悪鬼カーラは、熱中、没頭、耽溺となる。悪鬼ピシャーチャは、怠惰、嫌気、散漫、夢想、居眠り、愚鈍となる。以上がタマの住処である。

境地の住処は次の通り。覚醒の境地は、人間に宿るアートマンが目覚め、意識を発動させる原因となる。熟睡の境地は、アートマンが眠り込む原因となる。夢の境地は、人間に宿るアートマンが夢を見、寝言を発する原因となる。以上が境地の住処である。

## 42.

さて、根本原質の原理は、アートマンの身体と合一する<sup>60</sup>。心と呼ばれるものが人間にはある（が、その）人間における心と同じように、アートマンの身体に宿っているのである。アートマンに宿るとは、アートマンの身体の中に一体化しているということである。身体には肢部と呼ばれるものがある。（アートマンにおける）心とは、根本原質にあたるものであり、（アートマンにおける）心と身体とは、人間における肢部と本体とすることになる。それゆえ、心が善悪を集積する器<sup>61</sup>となる。心から善悪の行為が生まれる。人間は禍福を経験する。心から、対象を（感覚器官に）引きつけるものが生まれる。十の器官を道具とし、十の道を通路として。世界卵を経巡り、対象を感覚器官と結びつける。原理に通じる人<sup>62</sup>は、次のような次第で理解する。十の器官はすべての対象に引きつけられ、心に還っていく。心は認識根拠に還る。認識根拠は最高の法（ダルマ）に還る。最高の法は最高の終極に還る。最高の終極は最高の無窮<sup>63</sup>（たる神）に帰する。どうして最高の無窮（たる神）へと還るのかといえば、それは、ヨーガの最高行者が知る秘伝<sup>64</sup>の故である。その秘伝とは、正しい知識を松明とせずに修得することはあり得ない。それこそ<sup>65</sup>、秘伝を知るための営みである。

（ただし）それは正しい知識を根本原因として得られるものではない。神の至高性はそこから（直接）生み出されるものではないからである。（一方）正しい知識は、誓言、苦行、ヨーガ、瞑想<sup>66</sup>を基礎とせずに習得することはあり得ない。要するに、誓言、苦行、ヨーガ、瞑想を基礎とし、正しい知識を松明とし、秘伝を手段として、神の至高性を獲得する<sup>67</sup>のである。それは放たれる矢のごとくである。的にまっすぐ向けて弓がひかれる。射手は弓を構え<sup>68</sup>矢を放つが、矢の行く先は（必ずしも）真っ直ぐではない。しかるべく弓の行方を制御する力は持っているのだが<sup>69</sup>、（結果として）的から逸れる。

その意味するところはこうである。誓言、苦行、ヨーガ、瞑想を修得し、秘伝を実践する人がいるとする。そうであっても、正しい知識には到達しておらず、彼はまさに厳しい瞑想の最中である。つまり、道は極めて厳しいのである。彼はその（正しい）知識の目指すところがわからず悩む。なぜなら彼は原理の知識を理解していないからである。正しい知識を松明としていないからである。確かに、...<sup>70</sup>、もしそうだとしたらヨーガの最高の行者の瞑想は的外れ<sup>71</sup>ということになる。誓言の成果は、享受すべきものを求め、導くことであり、つまりアートマンが真っ直ぐに天界に至ることである。瞑想の成果は、誓言の成果を保護することである。誓言の成果を享受してアートマンは天に昇る。それから再びアートマンは下りてきて人間界に生まれる。王になり、富み栄える。前生で善業をなした（からである）。人間の本性は、意識と無意識に支配される。意識がはっきりしているときは、その人生でよき性質が生み出される。無意識に陥ると、その人生で悪い性質が生み出される。それで輪廻転生となり、天界、地獄、人間界、畜生界へと至ることになる。

このように、解脱を求めて遊行する<sup>72</sup>人間の薫習<sup>73</sup>が作用する。正しい知識がないからである。

#### 43.

さて、（正しい知識に）先んじてあるのが世俗の知識であるが、それは薫習が集積され最高のレベルになった状態である。それで正しい知識を獲得しようと努めるのである、彼は誓戒、苦行、ヨーガ、瞑想を基礎にして（そう）するのだが、もし彼が正しい知識を得られないのであれば、それは、瞑想が確立していないからである。それはどういう意味か（と言えば）、こういう次第である。サットワ、ラジャ、タマ、これらは調和するものではない。「善行をなし、自らの善き務めを指向したい」、これはサットワな人の言葉である。「私は怒り心頭だ」、これはラジャな人の言葉である。「嫌だ、疲れた、飲み食いもしない、寝るだけ」、これはタマな人の言葉である。サットワ、ラジャ、タマ（それぞれの性質の人たち）の思いはこのようである。（互いに）妨げ合い<sup>74</sup>、調和することがない。ラジャとタマは、その本性として愚昧である。サットワは聡明、博識、分別を本性とするものである。原理に通じる人<sup>75</sup>はこういう次第で理解しているのである。したがって、ラジャとタマは瞑想をする中で鎮められなければならない<sup>76</sup>。調息<sup>77</sup>を通して、心と統覚と思考<sup>78</sup>とを伴って。（ラジャとタマが瞑想の中で）鎮静し、動揺が消え、穢れなく、澄みわたり、曇りなくなるとき、それは麗しく無垢な知識（を得る）。ラジャとタマのアートマンは、満ち足りて、動じることなく、サットワに合流する。サットワにある聡明さがこうして、瞑想から生まれる智慧と結びつく。智慧が獲得されれば、正しい知識が姿をあらわす。最高のヨーガ行者たることによってそれは獲得されるのである。正しい知識があれば、秘伝を知り得る。誓戒、苦行、ヨーガ、瞑想に基づいて。彼



は自らの行いを正しく方向づけ、最高のヨーガを実修する。正しい知識を松明にし、秘伝を手がかりに、誓言、苦行、ヨーガ、瞑想を基礎にして。その秘伝とは、尖った鋭い矢の如くである。その正しい知識とは、翼の如くである。また、その誓言、苦行、ヨーガ、瞑想とは、弓<sup>79</sup>の如くである。彼は秘伝を執り行う。正しい知識を翼とし、誓言、苦行、ヨーガ、瞑想を弓として。

#### 44.

さてここで、秘伝について考察しなければならないであろう。秘伝 (prayogasandhi) と呼ばれるものは、目的達成の手段であり、(具体的には) 次の種類がある。すなわち、坐法、調息、制感、凝念、禅定、思惟、三昧である<sup>80</sup>。これらすべてが絆となるものである。(prayogasandhi の) sandhi とは、統合力のある聡明な意識のことである。それは並び立つものなく、不動である。静穏で、...<sup>81</sup>、四禅定<sup>82</sup>において具現する。四禅定は列挙すれば、止住、食、進行、睡眠である。止住とは、神が座しておられる(ということである)。食とは、神が召し上がる(ということである)。進行とは、神が進まれる(ということである。)睡眠とは、神が眠られる(ということである。)要するに、神をこそ憶念すべきである。(座る、食べる、行く、眠るといった)あらゆる営みが人間の性質となっている。なぜならば、それは意識と呼ばれるものであるから。それは神の身体として、そのように具現しているのである。

さて、坐法と呼ばれるものがあるが、次の種類がある。蓮華坐、金剛坐、椅子坐、十字坐(吉祥坐)、智慧坐、長坐<sup>83</sup>。この6つの異なる坐法があるが、(我々の)身体は一つである。(したがって)座る場所を選び、秘伝を繰り返して実修しなければならない。坐法の修習の後には、心の一つに向けて、(神の)聖なる命と(我が命とを)統合しなければならない。聖なる命との統合の後に、調息をおこなう。

浄めの風というものがある。種類としては、レーチャカ、プーラカ、クンバカ<sup>84</sup>がある。レーチャカというのは、最初の風を口から完全に吐き出し、しっかりと開口を閉ざす。それから改めて風を吸入する。

プーラカというもの、クンバカというものがあるが、風を吸入したのち、息を止める。しっかりとその吸気を留めなければならない。それで(気門の)閉鎖へと至る。(しかし)風は眼孔から(も)漏れる。(気門閉鎖の)修練がなされていないと、鼻から漏れる<sup>85</sup>。風がゆっくりと入ってくるのである<sup>86</sup>。閉気は1日に7回。大変であっても休んではならない。この閉気は、変動があってはならない。調息の目指すところは、ラジャ的、タマ的なものを鎮め、サットワ的なものを活性化することである。もちろん、肉体のみに関わる問題ではないのである。

さらに、これとは異なる氣息の閉鎖(のやり方)がある。氣息を漏らすことはない。要するに完全に音も消える。その名称はレーチャカ、プーラカであるが、高次のそれで

あり、秘法の氣息閉鎖を行うものである。端的に言えば、それによって意識が活性化され、芭蕉の花の中において（意識が）安定する<sup>87</sup>。そこにそれが安定すれば、自制された心（の音）が聞こえ、体内の器官にも伝わる<sup>88</sup>。それは秘法としての生命の誕生の儀式を執り行うこととみなされる。誕生の儀式とは、微細なるものへの崇敬である。そのために三昧行を厳しく実修すれば、粗大な風が減することは明らかである。それが理由で死滅するということである。なぜならば、アートマンによって知覚されることがないからである。秘法の氣息閉鎖とは以上の通りである。

#### 45.

次に、制感のヨーガと呼ばれるものがある。それは、すべての感覚器官がその対象から引き離されることである。心と統覚と思考を（土塊をこねて一つにするように）まとめる<sup>89</sup>ことである。うつろいさまようことは許されない。清浄なる心において統合されるものである<sup>90</sup>。これが制感のヨーガと呼ばれるものである。

対立を離れ、変容なく、煩いなく、静謐で、動揺せず、覆い隠すものがない知識、それが禅定のヨーガと呼ばれるものである<sup>91</sup>。

すべての門、すなわち鼻、口、耳を閉じなければならない。先に吸入した氣息は頭頂で放出される。もし、氣息がそこを通っていくような修練がなされていないと、鼻を通して漏れ出ることになる。氣息が出て行くのはゆっくりとである<sup>92</sup>。これが調息のヨーガと呼ばれるものである<sup>93</sup>。オームという音は心に住している。それを心に念じなければならぬ。ヨーガ（実修）の際に、それが消滅すれば、その音の響きは空だと言われる<sup>94</sup>。そのような音はシワのアートマン、つまりシワ神を身体とするものである。これが凝念のヨーガと呼ばれるものである。

最高の意義をもつ聖なるものは、まさに虚空（のごとく）である。しかしながらそれは虚空とは異なっている。それには音がない。それが最高の意義あるものと呼ばれるものである。空っぽということとは違う。穢れ（執着）がないということと等しい。これが思惟のヨーガと呼ばれるものである<sup>95</sup>。

その知識は、放逸なく、妄想がない<sup>96</sup>。彼には願望がなく、欲もない。清浄で、消滅することがなく、曇りがない。その意識は実体をもたない。なぜなら、身体を知覚することがなくなっているからである。認識の四要素を捨て去っているのである。認識対象、認識主体、認識行為<sup>97</sup>、これが認識の四要素と呼ばれるものである。これらはいずれも、最高のヨーガ行者には無縁である<sup>98</sup>。清浄な心が安定していればこそである。

心に還ると言われるのは、まず、意識が確立することである。心と呼ばれるものに定着させられるのである。第二は意識の整理である。つまり、心を認識根拠に立ち返らせる。心を認識根拠に立ち返らせるものは何かとせば、それは、心と統覚と思考とである。まさに、明瞭な意識が生まれ、具現する。それは水晶のごときである。水晶玉のよ

うだということである。その輝きの強烈さ故である。水晶の知識と呼ばれるものがあるが、その聖なる水晶の知識は、炎のような光輝で、それはすべての原理を焼き尽くす。善悪の業も焼き尽くす。なぜ善悪の業とすべての原理とを焼き尽くすのか、といえば次の通りである。聖なる水晶の知識はブラフマーの在所にある。そこで安定している。すべての原理および善悪の業は焼かれて灰になると考えられる。それは供養、聖なる祭火への献供、捧げ物することだと言われる。すべての穢れを完全に滅するのである。以上が凝念のヨーガと呼ばれるものである。

## 46.

意識が定着する第三の場所について言えば、聖音オームは心にあり、シワの原理へと吸収される。言い換えれば、心は頭脳から解き放たれる。(感覚器官では認知できない)微細なるものに精神集中するようになる。第四の境地を具現させるが、それは、最上なるものの認識に努めることである。輝かしく<sup>99</sup>、よく照らし、じっとしていることなく。瓶の内部にある灯明の様相に等しく、安定して長い間輝き続け、知識の究極に精神集中する。意識の裂け目を体現し、密教の知識の深奥に向かう。まだ決して眠り入ることはない。なぜならば、覚醒の境地と呼ばれる状態を保っているからである。その覚醒の境地は第四の境地と一体化する。神々は視界から消え、禪定の中に合流する。

さて、聖なる根本原質の思念について別の説明がある。それは(人間の)頭脳から送り出た<sup>100</sup>ものである。それは密意<sup>101</sup>と呼ばれ、根本原質および個我とは切り離されており、意識と無意識の間隙<sup>102</sup>を待ち受けている。そのようなアートマンは最高のダルマと呼ばれる。七支(saptāṅga)と七甘露(saptāmṛta)の薫習を身に受け、七火(saptāgni)によって支えられている。

七支とは、個我、サットワ、ラジャ、タマ、統覚、意、自我意識<sup>103</sup>。七甘露とは、声、触、色、味、香、知、想<sup>104</sup>。七火とは、見る、聞く、味わう、嗅ぐ、所有する、認識する、構想する<sup>105</sup>。

最高のヨーガ行者は七支の知識を体現する。坐法を超越している<sup>106</sup>が故に、彼の身体は完全なものになっている。障害に見舞われることもなく、老いや死に苦しむこともない。七甘露を知ることは、彼の命となっている。だからこそ、最高のヨーガ行者は若々しい。彼の生命はふつうの人の寿命とは異なる。七火を知って彼は安定を保つ。それゆえに、最高のヨーガ行者は遍満する。思い通りに姿を具現する。なぜならば、主たる神は七火と呼ばれるからである。それゆえ、その聖なる七火は七支や七甘露を焼き尽くす。なぜならそれらは邪魔物<sup>107</sup>となるから。邪魔物というのは、三つの特質の薫習であり、アートマンの身体に付着するものである。次のような喩えがある。それはあたかも阿魏の入れ物となった土瓶のごとくである<sup>108</sup>。土瓶から阿魏(の臭い)を取り除こうとするなら、どの土瓶はきれいに洗い流さなければならない。それでも、その瓶の中は阿魏の

臭いがするものである<sup>109</sup>。三つの特質の薫習はこのように喩えられる。アートマンの身体に付着するものである。(修行の過程で)瞑想の初期においてはなかなか消し去ることはできないが、最高のヨーガ行者はこれを焼き尽くしてしまう。(彼にとっては) いったいどうしてこのような邪魔物があり得ようか。

#### 47.

「ガンダルワを見た」、「ウィディヤーダラを見た」、というような感覚が、ヨーガ実修の最中の最高のヨーガ行者にあらわれる(ことがある。)また、「神々が姿をあらわされた」(と見て)、最高のヨーガ行者が、(その神々を)黄金の獅子の座にお招きして座るように申し上げる(ということも起こる)。また、(最高のヨーガ行者が)聖なる仙人の到来を見て、花の雨でお迎えする(こともある)。さらには聖典の意義を伝える(ことも起こる)。はたしてヨーガ実修中に最高のヨーガ行者が言葉を発することがあり得ようか。このように、最高のヨーガ行者でもサットワな障碍に見舞われる<sup>110</sup>。

一方、次のようなことも観察される。あたかも、放り出される、揺さぶられる、振り回される、振動をうける、空中に浮き上がるといったよう(な感覚を)、最高のヨーガ行者の体が(感じることもある。)女性、ダーナワ、ダイティヤ、ラクシャサ、(これら)が最高のヨーガ行者の禅定を妨げる。こういったものがラジャの障碍である。

ヨーガ実修の最中に最高のヨーガ行者の体が重くなるとか、あるいは、突然、(何か)体に触れたり、雷が落ちる(ような衝撃があったり)、体の中に何かぎっしりと詰まっている(ように感じたり)、毛が逆立ったり、(体が)押しつけられる(ように感じたりする)<sup>111</sup>。(また)ヨーガ実習の最中に、何か忘れてたり、混乱したりして、意識を失ったかのようなことがある。居眠り(しないよう)に気をつけていても。このように、最高のヨーガ行者でもタマな障碍に見舞われる。ましてや、ヨーガを終えたときには、これらの障碍に遭遇するのは言わずもがなである。

そなたら(ふつうの人間)が恐れているのは、悪行をなせば、教えの通り、その果を身に受けるということである。それを最高のヨーガ行者は全身全霊を込めて焼き尽くしてしまうのである。(それには)三昧の実修が不可欠であり、また、七火に精通しなければならない。三昧に入り明晰になれば<sup>112</sup>、意識を具現し、すべてを知り、なすべきことをすべて行う者となる。三昧の最中に聖なる七火の炎が難なくして(現われ)、障碍たる幻想を焼いて灰にしてしまう。ついには、最高のヨーガ行者の身体は、清浄にして曇りなく、覆うものなく、穢れがない。あたかも、澄み切った虚空のごとくである。これが思惟のヨーガと呼ばれるものである<sup>113</sup>。

#### 48.

かくしてアートマンは最高の終極<sup>114</sup>へと還っていく。常住のシワの原理に帰一する

のである。すべてを知り、なすべきことをすべて行う者として。(彼には)知る力、遍満する力、支配する力、行動する力がある<sup>115</sup>。この常住のシワの原理は、業の熟果の残滓<sup>116</sup>とは無縁である。業とは善悪の行為である。熟果とは、果実が熟して(すなわち、善悪の行為の結果が)それを体で味わう(すなわち身に受ける)ことである。残滓とは、享受して残ったものである。それ(残滓)がアートマンに付着すると、(その影響下で)次の行為を行うことになる。それが薫習と呼ばれるものである。かつての行為の薫習が悪であれば、人は(次に)悪行をなしてしまうことになる。かつての行為の薫習が善であれば、人は(次に)善行をなすことになる。これ(薫習)がまったくアートマンに付着しないのであれば、業果の残滓とは無縁であると言われる。ということは、常住のシワの原理は善悪を超越している。

さて意識の第四(の特徴)として、それは確立、安定している。第五として、意識は本性として善である。こう説かれる。聖なる最高のものが終極に帰還する。いったいどうして最高の無窮<sup>117</sup>に還り行くというのか。それは第四の終極の境地であり、三昧を専らとしている。第四の終極の境地とは、二つのことから解脱している境地である。二つとは、「ない」と「ないのではない」の二つである。言い換えれば、不可分なものからさらに不可分であるとか、微細なるものよりもさらに微細であるとか、極小なものよりさらに極小であるとか、世俗の物事から超越しているとかいうことである。すべてを知るとか、なすべきことをすべて行うとかいうことを止め、孤高で、何ら目的をもたず、歩まず、流れず、揺るがず、動じない。確固として不動である。これが三昧のヨーガと呼ばれるものである。なぜなら三昧というのは、すべての(ヨーガ実修)の方法を結びつけるものとなっているからである。こうして常住のシワは確固として存在する。これが最高の終極に還るということである。

#### 49.

最高のヨーガ行者が獲得する三昧というのは、どんな類いのものか。明らかに彼は八つの自在力を眼に見える具体的な形でものにしている。その八つの自在力と呼ばれるものはいったい何か。座して(瞑想の)後に至高のヨーガに到達すると、超自然力と呼ばれる能力が備わる。列挙すれば次の通り。微細変化、軽浮変化、極大変化、自在獲得、如意、君臨、支配、自在移動<sup>118</sup>。

微細変化とは、その最高のヨーガ行者の体が最初は粗大であったものが、後に微細に、極めて小さくなり、そのために最高のヨーガ行者はどこを目指そうとも(その目的地への移動が)叶う<sup>119</sup>。岩に遮られることもない。地中に潜り込む<sup>120</sup>こともできる。彼のこの自在力に匹敵するものはない。これが微細変化と呼ばれる。

軽浮変化とは、その最高のヨーガ行者の体が最初は重かったものが、後には綿のように軽くなり、そのために最高のヨーガ行者は空中浮遊する、(すなわち)空中を進む。(ま

た)水中移動する(すなわち)水の中を進む。これが軽浮変化と呼ばれる。

極大変化とは、彼がよその地に赴いても尊ばれ、敬われ、崇められ、行き先がどこであれ煩いはない。これが極大変化と呼ばれる。

自在獲得とは、彼が望むものはすべて、労なくして手に入る。これが自在獲得と呼ばれる。

如意とは、彼が老若男女いずれもの姿をとることができ、全世界の知識を獲得することができる。これが如意と呼ばれる。

君臨とは、彼が神々の居所である天界に赴き、すべての神格から尊ばれ、敬われる。あるいは、彼が神々を従える力を持ち、神々は彼に抗弁できない。なぜなら主たる神が最高のヨーガ行者の身体に宿っているからである。これが君臨と呼ばれる。

支配とは、彼の言葉に逆らえる者がおらず、彼のいかなる望みも邪魔されることがない。これが支配と呼ばれる。

自在移動とは、彼が神々に命令を下す力を持ち、主となり、彼の言葉に逆らう者なく、邪魔されることなく、呪術師のごとく神々を呪い、はたまた、彼の意に沿わない人間になる。これが自在移動と呼ばれる<sup>121</sup>。

## 50.

以上が、八つの自在力と呼ばれるものである。これは、至高のヨーガを修得した者の印である。なぜならば(そのような者には)(現世での)死が到来しても、来世と呼ばれるようなものはなく、解脱と呼ばれるものが(獲得される)。このような印が彼に見られるのである。(つまり)解脱と呼ばれるものを獲得されるお方となるのである。至高のヨーガを修得すれば、その印たるものが気づかれないことはあり得ないからである。

では、最高のヨーガ行者が即座に解脱しないのはいったい何故か。それは、至高のヨーガを修得した後にそのように呼ばれるもの(解脱)があるからである。あるいは別の説では、彼は具体的な姿をとって世界に遍満することが可能で、自身の命を放棄することもある。体の主要部である頭脳を(自ら)切り離すことができるのである。最高のヨーガ行者には行為(の結果)が付着することはない。なぜならば、ヨーガの境地においてその(行為の)一切が焼く尽くされてしまうからである。したがって最高のヨーガ行者には行為が付着していない。

また次のように説く人々もあるだろう。ラジャとかタマとか呼ばれるものの薫習はヨーガの境地より以前に既に焼き尽くされ、サットワの薫習のみが最高のヨーガ行者に取りつく。なぜなら本来の性質としてそうなっているからである。というのも、最高のヨーガ行者のサットワの統覚の結果がラジャの統覚を滅するのである。最高のヨーガ行者は速やかにそのサットワの統覚を体現する。ついには、最高のヨーガ行者はそれを享受したのちに、完全に滅する。すると、すばらしきことに、八つに分かれた<sup>122</sup>形で

あらわれるものがある。(つまり)八つの自在力を身に具えることになる。最高のヨーガ行者がサットワの薫習を享受して(その作用が)停止すると、五大元素<sup>123</sup>は分解し、一つずつ、不変不動なる彼のもとに還って行く。このように、最高のヨーガ行者は明晰な知覚と意識をもち、その身体は、秘伝を通じ、誓戒と苦行とヨーガと瞑想とを基礎として、最高のシワの原理としての神(の身体)に帰一するのである。

以上、聖なる原理の知識、聖なる秘伝は完結するものである。正しき知識を松明として。

注

- 1 前号所収の第2編(18-33節)(安藤2013)に続く訳注研究。本テキスト(Tattwajñāna, 以下Tj)の概要については、第1編(安藤2009)を参照。
- 2 mawastwani: この語形と意味については前編の注69(安藤2013, p.218)参照。
- 3 覚醒以下の5つの境地については、Wrhaspatitattwa(以下WrT)47(安藤2008, pp.51-52)参照。
- 4 ātmasaṅsāra: WrT 47ではアートマンの抛り所としての覚醒・夢・熟睡の境地を繰り返して移動することをこう呼んでいる(安藤2008, p.50)。
- 5 mahalētをmahēlēt(“separated by”)(Zoetmulder 1982, 以下OJED)と読み替える。
- 6 matumpaṅ-tumpaṅ: “in layers”(OJED)。WrT 14でも同様に「蜂の巣のように層をなす」と表現している(安藤2008, p.31)。
- 7 wurāwutan: OJEDにはwurañutanという語形が登録されている。
- 8 anilānila: OJEDにはanilanīla(“light and dark?”)も登録されているが、ここではnīla(“dark, blue, also with sapphires”)からのa-形容詞形の疊語と解しておく。
- 9 WrT 47では、アートマンは睡眠中に根本原質の原理(pradhānatattwa)が遍満して無意識の状態になるとする(安藤2008, pp.50-51)。
- 10 sahiṅan iṅ pradhānāmēṅku: amēṅkuのままでは理解しがたく、amaṅku(>paṅku, “to support; to carry in both hands or arms in front of the chest”)と仮に読み替える。
- 11 kahasan kalañlanan kaparacakra juga de niṅ manah mañalpane: 文頭の3語はいずれも、“to wander, roam about, move in all directions”といったほぼ同義(OJED)であり、訳し分けていない。
- 12 satapa: tapaという単位については他の古ジャワ文献に見当たらない。
- 13 baṭāra mahulun: WrT 72では、baṭāra mahulunはyogīśwaraにあるとしている(安藤2008, p.69)。
- 14 tūryāntapada: WrTでは第四の終極の境地については47および61で解説する(安藤2008, pp.50; 64)が、ここでの記述とは重ならない。
- 15 WrT 14ではśaktiとはsarwajñaとsarwakāryakartāであるとしている(安藤2008, p.31)。
- 16 この4種の力については、WrT 3及びTj 4でcaduśaktiと総称するが、ここではその名には言及していない。また、列挙の順がTj 4とは異なっている(安藤2009, p.163)。
- 17 これらpramāṇaに関してはWrT 26に言及がある(安藤2008, p.36)。
- 18 utpatyakēna: utptatti(utpati)の派生形であることは明らかだが、-akēn形はOJEDに未登録。Cf. aṅutpatti “to be born or reborn, incarnated, come down to earth”。
- 19 bhuwanaśarīra: 熟語としてOJEDに登録されていない。サンスクリットのbahuvrīhi複合語として解しておく。

- 20 WrT 36における六味の解説と同様であるが、列挙の順序が異なる（安藤2008, p.42）。
- 21 *kāma* を精液、*ratih* を血液とする解釈は OJED には記されていないが、WrT 33 で *śukra*（精液）と *swanita*（血液）の相対量として同様な論を展開している（安藤2008, pp.42-43）ことが参考になる。文脈からも、愛情・肉欲といった直訳よりも的確だと思われる。
- 22 五つの微細（*pañcatanmātra*）と五つの感覚器官（*pañcagolaka*）との対応について、WrT 33（安藤2008, p.43）及び *Nawaruci*（以後 NR）4（Prijohoetomo 1934, p.42）でほぼ同一の叙述をしている。ただし、WrT では五感覚器官を *pañcabuddhīndriya* と表現している。
- 23 *aṅḍa bhuwana*: サンスクリット語の *bhuwana-aṅḍa* という複合語が、後分の形容詞が前分の名詞を修飾という風に現地語的に転訛したと推測される（安藤2008, p.67, 注196参照）。なお、NR 4（Prijohoetomo 1934, p.42）でも、同じ語形で用いられている。
- 24 *saptapātāla*: WrT 68（安藤2008, p.67）、Tj 14（安藤2009, pp.169; 175）、NR 4（Prijohoetomo 1934, p.42）参照。
- 25 *saptabhuwana*: WrT では取り上げられていないが、Tj 14（安藤2009, p.169）及び NR 4（Prijohoetomo 1934, p.42）には同じ流れでの言及がある。一方 *Jñānasiddhānta*（以後 JnS）26（Soebadio 1971, pp.250-251）でも七つの世界を説明するが、そこでは、本書と対応関係が異なり、ブル=右足、ブワル=左足、スワル=生殖器官、熱界=顔、人間界=左手、大世界=右手、真実界=頭としている。
- 26 *wahakañ in talampakan*: *wahakañ* では意味不明であるので、NR 4の対応箇所の記述をふまえて、*walakañ* と読み替える。「足の裏の後部」つまり踵にあたる。
- 27 *lēmēñ sumnēñ*: それぞれ *lumēñ* (“to shine, glow” > *lōñ*)、*sumēñō* (“shining, radiant” > *sēñō*) と読む。
- 28 NR 4（Prijohoetomo 1934, p.42）に同類の記述がある。
- 29 *ariñēt*: OJED には *hariñēt* という語形でのみ登録がある。
- 30 *pōhan*: ローマ字転写（Acri 2007）は *vahan* としているが明らかな誤写。
- 31 *wuru*: ローマ字転写は *guru* としているが明らかな誤写。
- 32 *kukus*: *kuku* と読み替え。*kukus* のままだと “smoke, cloud” で意味が通らない。
- 33 *miṅḍuhur ta ya tēke pusar*: WrT 36でも同義の語彙で同じ説明をしている（*umiñruhur ta yēñ pusēr*）（安藤2008, p.96）。
- 34 *hana ta pañumalañ*: *pañumalañ* の基語と意味が不詳。脈管の数への言及が続くが、これも、WrT ほか、他の古ジャワ文献では見当たらない。
- 35 十の脈管は WrT 37の古ジャワ語解説部分で列挙されるものに等しい。そのサンスクリット引用句が挙げるヤシャーが欠落し、ハスティジフパーがハスティとジフパーに分割されて十となっていることについては、安藤2008, p.47（注105）参照。
- 36 *sēkul*: “cooked rice” を意識。
- 37 *wruh sma*: 意味不詳。
- 38 *wruh sma*: 意味不詳。
- 39 *umadi*: *adi* から派生した動詞として解釈しておく（OJED には登録されていない）。
- 40 *kāma* と *ratih* の訳については注21参照。
- 41 WrT 42-43（安藤2008, p.48）では、アパーナは肛門・男根にあって、機能は精液・血液、糞尿であるとし、消化機能はサマーナ風に配している。さらに、食物が胆汁に、飲み物が血液に、香るのが粘液という分類をしており、記述が本書とは異なっている。
- 42 WrT 44（安藤2008, p.48）では、ウダーナ風の機能を瞬き・額の皺・髪の毛とする。



- 43 humawas: 意味不詳。仮に humawa (OJED に登録がないが, hawa からの動詞 (cf. aṅhawakēn “to cause a person to become included or involved in one’s condition”) として解しておく。
- 44 watēb: 意味不詳。ローマ字転写が示す読み替え matōb (“thick, luxuriant”) も意味をなさない。WrT 46 でもサンスクリット詩節 (「嘔吐」) と古ジャワ語解説 (「伸び」) では意味が対応しておらず、本テキストとも呼応しない (安藤2008, p.49)。ここではヒンディー語注にならない、サンスクリット原典に従って解釈しておく。なお NR 4 では twab としている (Prijoetomo 1934, p.44) が、OJED にも現代ジャワ語辞典にも当該および関連語彙が見当たらない。
- 45 magawe kētēr kēlut in śarīra: 前半部分のみ WrT 46 と同一。
- 46 magawe ṅob: ṅob の語形が不詳だが、WrT 46 で maṅhwab gawenya と解説している (安藤2008, p.98) ことから、ここでも maṅhwab ないし maṅob (“to yawn”) (> \*hwab, \*ob) と同義であると推定される。なお中ジャワ語文献とされる NR 4 では aṅob としており (Prijoetomo 1934, p.44)、この語形は現代ジャワ語の辞書にも登録 (“to yawn”) されている (Robson and Wibisono 2002)。
- 47 magawe wahin: WrT 46、NR 4 と同一表現。
- 48 10 ないし 11 という風の数についての議論は WrT にはなく、他の文献での例も未詳。
- 49 五つのアートマンについては WrT では言及が全くないが、NR 4 では、同じ五つが pañcātma として列挙され、さらに、antarātma, anyātma, pāywātma, hantarātma, adhīrātma を加えて、十のアートマン (daśātma) と呼んでいる (Prijoetomo 1934, p.47)。
- 50 maṅrasani sinaṅḍaṅ hana salēmbut: 各語を字義どおりに訳し並べておくが、全体としての意味がはっきりしない。
- 51 ローマ字転写にならない、abo lawan awani と区切って解釈する。
- 52 maṅintut: Wrh 33 における感覚器官・感覚機能の対応の説明で、肛門にある排泄機能として aṅētut (“to fart”) を挙げている (安藤2008, pp.43; 93) ので、これに従って maṅētut と読み替える。なお、NR 4 でも maṅētut としている (Prijoetomo 1934, p.45)。
- 53 bhaga: ローマ字転写 naga は明らかな誤写。
- 54 maśuklaśwanita: 生殖器官との対応から順序を入れ替えて訳出。
- 55 trayodaśakaraṇa: WrT には見られない用語。他文献での用例も未詳。
- 56 五仙の名のうち、最後の Wṛtaṅjaya (異読 Wṛtaṅjala) は他の文献では Pātaṅjala (Rāmāyaṇa 24.95)、あるいはその訛った形 Prētaṅjala (NR 4) であるので、ここでも伝承の過程で語頭の p が w に、末尾の la が ya に置き換わったと見ることができるとは、とりあえずそのまま音写しておく。またこの Wṛtaṅjaya (Prētaṅjala) の住処に関して、本テキストの tumpuk niṅ śarīra という表現は意味がはっきりしない。NR 4 では、Kuruśya riṅ tahulan Prētaṅjala riṅ sumsum (クルシュヤは骨に、プレタンジャラは骨髄に) としており (Prijoetomo 1934, p.45)、本テキストよりも配置の別が明瞭である。
- 57 huṅḍu-huṅḍuhan: OJED では “uṅḍu-uṅḍuhan” を “a part of the ati (liver)?” と留保した解釈を示す。NR 4 の対応箇所では Śambhu riṅ inēban としているが、inēban の意味が不詳 (現代ジャワ語で “gate”?)。ここでは、仮に liver として訳しておく。
- 58 huyuh-uyuhan: OJED の poyuh-oyuhan (>uyuh, “bladder”) に準じて訳す。
- 59 この現地的な名称の悪鬼については本書第 18 にも言及される。第 1 編訳注 75 (安藤2009, p.175) 参照。
- 60 pradhānatatwa yēka pinakāwak saṅ hyaṅ ātmā: WrT 14 では、神 (bhaṭāra) によりアートマン

- の原理 (ātmataṭṭwa) と根本原質の原理 (pradhānataṭṭwa) が合体される (pinatēmwakēn) とする (安藤2008, p.32)。
- 61 pasañmoha: pasamūha (“collection, assemblage, group, herd”) と読み替える。
- 62 nipuṇataṭṭwa: ローマ字転写は triṅuṇataṭṭwa と読み替えているが、nipuṇa taṭṭwa と区切り、サンスクリットの taṭṭwa-nipuṇa の現地的転訛 (後分が前分を修飾) と解しておく。
- 63 anantawiṣeṣa: OJED は NR の例 (Sañ Hyañ Anantawiṣeṣa) (Prijoetomo 1934, p.82) を引き、“a (form of the) deity” として神の固有名称ととるが、ここでは文脈に沿って解釈しておく。
- 64 prayogasaṅdhi: WrT 50で、主宰神がこれまで最高のヨーガ行者らが秘密としてきたものとしてウリハスパティに伝える真理をこう呼んでいる (安藤2008, p.53)。
- 65 para ta: para を異読の sira に読み替える。
- 66 brata tapa yoga samādhi: 本書16で、サットワの統覚と五仙を関係づけてこの四つを挙げている (安藤2009, p.170)。
- 67 tumēkani: OJED に登録されていない語形。Cf. tumēke, anēkani (“to attain, obtain”)。
- 68 hru tanhiñ laras: 意味不詳。弓を一杯まで引くという意味か。
- 69 ana sarañuntit laku nikañ hru: sarañuntit の意味不詳。sārāñuntit としても añuntit は OJED に登録されていない。Cf. inuntitakēn (“(pf) to swing back and forth, hurl”)。
- 70 sarañuntit: 前注同様、この語形と意味が推定できない。
- 71 salah para: salah paran と読み替えると、“in the wrong direction, striving after the wrong object, missing its target” (OJED) と意味が通る。
- 72 lumicin: ローマ字転写 lumisin は誤写。
- 73 wāsanā: WrT 3で詳説される (安藤2008, p.24)。
- 74 mapalañan: 語形と意味が不詳。とりあえず palañ の派生形ととしておく。Cf. apalañ (“putting st. in the way”)。
- 75 nipuṇataṭṭwa: ローマ字転写は niṅuṇataṭṭwa と読んだ上に triṅuṇataṭṭwa と読み替えるが、前章42での用例と同じく、nipuṇa taṭṭwa と読んでおく (注62参照)。
- 76 tinēḍuhakēn: OJED に登録されていない語形。Cf. anēḍuh (“to placate”)。
- 77 prāñāyāma: 調息については次章44および WrT 56参照 (安藤2008, pp.60-61)。
- 78 citta buddhi manah: WrT 54にも一度この三つが言及される。他の用例については安藤2008, p.60参照。
- 79 dañḍacāpa: 一般には cāpadañḍa という表現 (OJED) であるので、それをうけて、dañḍa cāpa と区切って表記するのが妥当だと思われる。
- 80 WrT 53ではこのうち坐法を抜いたものを六支のヨーガとしている。六支と八支のヨーガについては、安藤2007参照。
- 81 tan paḍēm: 「直立不動ではない」という意味となるが論旨に合わないので訳出を留保。ヒンディー注は nirgandha (香りが無い) とするが、原語をどう解釈したのか不明。WrT 55では dhyāna の解説に hēñēñ-hēñēñ umiḍēm としており、hēmēñ tan paḍēm という本テキストの記述は、WrT のような叙述からの転訛とも推察される。
- 82 caturdhyāna: 他の古ジャワ文献での用例は未詳。
- 83 坐法については、Korawāsrama 34, 79 (Swellengrebel 1936, pp.70; 106)、及び NR 4 (Prijoetomo 1934, p.42) でも取り上げられている。
- 84 recaka pūraka kumbhaka: WrT にはこれらへの言及がないが、NR 4では本書と同様に列挙と解説が展開される (Prijoetomo 1934, p.43)。

- 85 WrT 56で、調息における気門（眼・鼻・口・耳）の閉鎖の要を述べている（安藤2008, p.61）が、そこでの要点は頭頂から氣息を出す修練である。本書では呼吸の停止と呼吸の出入り口の閉鎖を強調するのみで、頭頂について一切言及がない。他方、NR 4の記述は本書とほぼ一致する（Prijoetomo 1934, p.43）。
- 86 mahalona hy eki numbək: mahalon は alon (“slow, gentle, soft”) の派生とする。numbək は語形と意味が不詳、文脈から仮に訳しておく。なお、irit-irita yēki numbək とする異読があるが、NR 4では対応箇所が irit-irit aywa kinumbhaka と述べており、これだと「少量だけ漏らしても、呼吸停止とならないように」というような意味か。
- 87 ほぼ同一の表現がNR 4に見られる：ikañ tutur juga andēlakēna riñ kadalīpuṣpa（Prijoetomo 1934, p.43）。
- 88 wrustakēn riñ: 同様の叙述をもつ NR 4にならい、trus tēkēn と読み替える。
- 89 kinēmpēl: OJED の示す“(pf) to knead into lumps (clay)” という意味にとる。
- 90 kinēmpēl citta alian: WrT 54の古ジャワ語解説（安藤2008, p.60）では、kinēmitakēn in citta malilan（清浄なる心によってしっかりと守られる）としており、その方が意味がよく通る。
- 91 WrT 55の古ジャワ語解説部分（安藤2008, p.60）とほぼ同一の説明となっている。
- 92 WrT 56の古ジャワ語解説部分（安藤2008, pp.60-61）とほぼ同一だが、mahawan / adalan, sakasadidik / alon 等、用いる語彙の違いも見られる。
- 93 調息については前章44でも論を展開しているのだが、44ではNRに類する解説、45ではWrTに類する解説となっており、おそらく、本書の著者（編者）が異なる伝承に依拠したために、このような記述の混乱を生じたのではないかと推測される。
- 94 ya pañilan ikañ karēñ ri kāla niñ yoga yatēka śūnya nāranya: とりあえず字義にしたがって訳しておくが、同様な解説をする WrT 57の yapwan hilañ ika nora karēñ（それが消滅するので耳で聞かれることがない）という読みの方が意味がよく通る。
- 95 WrT 58（安藤2008, p.61）とほぼ同一の解説となっている。
- 96 tan panalpa: 三昧に関する WrT 58の解説にならい、tan panalpana と読み替える。
- 97 認識の四要素については、WrT 59古ジャワ語解説部分で総称および四要素の名称を列挙する（安藤2008, p.62）が、本書ではなぜか認識手段を除いた三つだけ取り上げている。
- 98 WrT 59の対応箇所（安藤2008, p.62）には、ここで「これが三昧のヨーガと呼ばれるものである」というまとめの言が来ているが、本書ではそれが現れないまま、さらに独自の論を展開（類例未詳）し、末尾で「凝念のヨーガ」と総括している。凝念のヨーガの説明は先に述べているので、調息のヨーガの記述と同様（注93参照）、これも複数の伝承を取り込んだための混乱かと推察される。
- 99 lēmēn: lumēn (>lēn, “to shine, glow”) と読み替える。
- 100 mēsāt: “to fly off, fly away, spring into the air” (>pēsāt) と解しておく。
- 101 abhisandhi: OJED には未登録だが、サンスクリット語の原義と文脈から訳しておく。
- 102 patajya: 語形も語意も不詳。仮に pantajyan (>antaji, “intermediate space”) と読み替えて訳しておく。
- 103 WrT 62が挙げる七支（pṛthiwī āpah teja wāyu ākāśa buddhi manah）とは、統覚と意のほかは全く異なることが注目される（安藤2008, p.111）。
- 104 WrT 64が挙げる七甘露と比較すれば、知と想の順序の違いと、語彙の違い（sinankalpa / winikalpa）だけである（安藤2008, p.111）。
- 105 WrT 63は、嗅ぐ、味わう、見る、触る、聞くという順で五感を挙げ、続いて mamikalpa（構

- 想)と *manawruh* (認識) に言及する (安藤2008, p.111)。本書では五感のうちの触が欠落し、かわりに *mañaku* (所有) が加わっている。
- 106 *nirāsana*: OJED に未登録。仮に *āsana* に否定辞がついた形ととり、比喩的に訳しておく。
- 107 *upasarga*: 邪魔物については、三特質に由来して最高のヨーガ行者にとりつくものとして WrT 74 に詳細な解説がある (安藤2008, pp.69-71)。
- 108 土瓶に付着する阿魏の香りを例示する薫習の比喩が WrT 3 (安藤2008, p.24) や Ślokāntara (以後 SI) 66 (Sharada Rani 1957, p.65) に見られる。
- 109 WrT 3 では「阿魏を捨てて、瓶をこすってきれいに洗っても、臭いが残る」と述べ、SI 66 ではより簡略に「阿魏を入れた土瓶にはその香りが消えない」とする。
- 110 WrT 74 では、三特質に起因する障害のうち、サットワの障害の四要素 (*darśana, śrawaṇa, boddhawya, gandha*) の一つとして、「ヨーガ中に神のような姿が見られる」という *darśana* の障害を略述する (安藤2008, pp.69-70)。
- 111 *pinēṭēkakēn iñ hatēk: iñ hatēk* は意味不詳なので、WrT 74 にならい、*ikāwak* と読み替えるべきと思われる。ただし、WrT では、この「押しつけられる」説明をラジャの障害の一例として取り上げていることに注目 (安藤2008, pp.70; 115)。
- 112 WrT 74 では、最終節で外的療法による障害の治療について述べるが、そこでは、「三味に入れば身体が意識の外におかれる。ヨーガ実修の折りには身体の感覚をもってはならない」とし、身体に対する意識を現世の苦とまで表現している (安藤2008, pp.70-71)。本書の叙述では、意識や知識のことをそこまで否定的に捉えていないのと対比される。
- 113 思惟のヨーガについては既に第45章で解説されており、最後に改めて思惟のヨーガを持ち出してまとめるのは文脈からはずれる感がある。調息、概念の場合と同様 (注93及び98参照)、複数の伝承の影響か、写本伝承の混乱か。
- 114 *antawiṣeṣa*: 本書第42章で言及している。
- 115 常住のシワとその四種の力については、本書11で詳説している (安藤2009, p.163)。
- 116 *karmawipākāśaya*: OJED には未登録。この語の意味解説が後に続くが、WrT ほか、関連する古ジャワ文献に類例が見られない。いかにもサンスクリット由来の熟語であるが、Gonda (1973) も言及していない。
- 117 *anantawiṣeṣa*: 文脈からすれば、ヒンディー注のように *antawiṣeṣa* と読む方が適切かと思われる。本章最後でも *antawiṣeṣa* として総括している。なお *anantawiṣeṣa* という語は、本書42で「*antawiṣeṣa* から *anantawiṣeṣa* に帰する」という趣旨の中で用いられている (注63参照)。
- 118 WrT 66 の古ジャワ語解説部分で列举する用語と順序が同一。なおインドのタントラ文献 *Svacchandatantra* が挙げる八自在力については、安藤2008, p.66 参照。
- 119 WrT 68 では軽浮変化の説明の中に同一の叙述が用いられている (安藤2008, p.67)。
- 120 WrT 67 では「水中に潜る (*masilurup iñ wway*)」としている (安藤2008, pp.66-67; 113)。
- 121 WrT 74 では「従わない者には神でも人でも獣でも罰を与える」と述べており、神々にも命令するという点では共通するが、本書の表現とは趣を異にする (安藤2008, p.69)。
- 122 *pinawolu*: OJED に登録されていないが、*pinatiga* (> *tiga*, “(pf) to divide in three”) にならい、*pinawolu* (> *wolu* [*wwalu*] “(pf) to divide into eight”) と解する。
- 123 *pañcamahābhūta*: 本書13-14で解説されている (安藤2009, pp.168-169)。

参考文献

- Acri, A.  
2007 *Saṅ Hyaṅ Tattwajñāna* (electronic text, based on the edition by Sudarshana Devi)
- Gonda, J.  
1973 *Sanskrit in Indonesia*, New Delhi (2nd ed.).
- McGregor, R.S. ed.  
1993 *The Oxford Hindi-English Dictionary*, Oxford.
- Pigeaud, Th. G. Th.  
1967-80 *Literature of Java*, 4 vols., The Hague.
- Prijoetomo  
1934 *Nawaruci. Inleiding, Middel-Javaansche prozatekst, vertaling*, Groningen.
- Robson, S. and Singih Wibisono  
2002 *Javanese-English Dictionary*, Singapore.
- Sharada Rani  
1957 *Ślokāntara*, New Delhi.
- Soebadio, H.  
1971 *Jñānasiddhānta*, The Hague.
- Sudarshana Devi Singhal  
1957 *Wṛhaspatitattwa*, New Delhi.  
1962 *Tattwajñāna and Mahājñāna*, New Delhi.
- Swellengrebel, J. L.  
1936 *Korawāçrama. Een Oud-Javaansch proza-geschrift*, Santpoort.
- Zoetmulder, P. J.  
1982 *Old Javanese-English Dictionary*, 2 vols., 's-Gravenhage.
- 安藤 充  
2007 「古ジャワ語シヴァ教文献“Wṛhaspatitattwa”の源流について」『印度学仏教学研究』（日本印度学仏教学会）第56巻第1号，pp.262-268.  
2008 『古ジャワ世界におけるシヴァ教の受容と展開』（平成16年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，全119頁。  
2009 「古ジャワ語シヴァ教文献「原理の知識」和訳（1）」『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第24号，pp.161-176.  
2013 「古ジャワ語シヴァ教文献「原理の知識」和訳（2）」『人間文化』（愛知学院大学人間文化研究所紀要）第28号，pp.217-230.

